方向音痴な俺様

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
方向音痴な俺様

【Ｎコード】
Ｎ８８０５Ｏ

【作者名】
御紋

【あらすじ】
方向音痴な俺様は、いつでもどこでも迷子の子。そんな俺様は、ただいま勇者さまチームとバイト中です。王様、とっとと倒れて呆けろ。といいたい本音は国では言えないので、某所で叫んできますね。
あ、また遭遇しちゃった。勇者さま～。（叫んでみた）

【なんとなく書いてみた作品。予定では最初の短編だなとか思ってたやつでした。ご賞味ください】

（前書き）

思いつきで書いた作品です。
呪文とかよくわかんなくてもスルーしてください。
よろしくおねがいしまああす！

【じつは竜とり書く前に書き上がってました・△・し】

俺は、方向音痴だ。

…自称のみならず他称蔑称敬称尊称めぐりめぐってありとあらゆる人々にまで俺はそう認められている。

伝説は、俺さまの自我が芽生える前より始まる。

曰く。

「上天気のなか、なぜか音が鳴る方向の斜め後ろへとハイハイしだした」

ちなみに、そのとき俺との和やかな親子の時間を期待した父親はその日の夕食を食べれなかった。

曰く。

「釣りに出かけるといいながら、村の広場へと歩きだした」

そのときも、親子の交流を望んで釣りに同行しようとしていた父親は、男泣きに「そんなにお父さんが厭なのかっ」と叫んだらしい。これは、その場にいた村人Aが確認している。

曰く。

「隣町への行商に同行するときに、いきなり街道の斜め向こうにに走る山へと1人で歩きだした」

これは、俺の社会勉強にと父親がすすめてきた俺専用のクエストでの出来事だった。方向音痴でも、剣と魔法はまあまあ扱えた少年だった俺を隣町の友人に自慢したかったのだと父親は後に語った。ざけんな、俺は商品じゃない。

そのころ、すでに俺の危険きわまりない方向音痴癖はもう村のみんなには認識されていたので、父親のそのクエストは無理だと出発

する前にいわれていた。
村長だった父親は、かたくななまでに「俺の息子だ、大丈夫だ」と胸を張っていた。
村のギルド名誉顧問であると同時に優秀な魔法使いであった母はそんな父親にいろいろといいふくめようとしてくれたのだが。（いろいろの内容か？　…そうだな。命に支障はないし怪我もしないが、悪夢をみる程度あるいは奥歯を噛みしめながら寝言を言う程度には、精神的にもやっとする内容だと認識してくれたまえ）
俺に関することだけは、譲ろうとしない父親がなんとかごり押ししたらしい。（その後、今度は母のクエストによって、行商の旅の護衛人数が跳ね上がった）
伝説はつづく。
「町のギルドを出ようとしたらぐるぐるギルドの中を一周まわりつづけていた」「猫の鈴を試しにつけてみたら、やはりなぜか屋根の上から音がした」「地図と磁石があっても奴は迷走した」「迷子につける薬はないと医者がさじをなげて、首輪を差し出した」エトセトラ。
後者になるほど、諦めが強くなっていくのは仕様か。
つぶやいたところ、「仕様だろう、おまえ限定のな」と答えたのは隣家の料理屋の息子だ。
……腹がへった、魚定食ひとつくれ。

まぐまぐ食べる、飯は旨し。

――　明日はバイトだったな、面倒くさい…。

魚のしっぽをくわえていたら、行儀が悪いとつっこまれた。

…水、ください。

ちゅどーん。

たーまやー。

火炎魔法の爆風に乱れた前髪を、手櫛で直すお仕事。

向こうで燃えてるのはゴブリン3体。

往生せえやとばかりに、勇者さまが剣を一振り。いやあ、容赦ないねえ。

バクッと割れた奴らは、そのまま舞台を退場。

仕上げに神官さまが呪文を唱えた。

祝福と浄化の呪文。

そうすることで世界は正しく循環するのよ、と故郷の村で神官やってた従姉妹が説明してくれたなあ、なにやら世界の成り立ちに影響するとかなんだとかいっていたが。

まあ、俺にはあんまり興味そそられなかったので、どうでもいいですが。

「ありがとうございます！」

今日も助けていただきましたー。

笑顔でみなさまにご挨拶。

今回の勇者さまがたはとてもお強いので、不安は残らない。

「……気にするな」

「……一応、こっちが頼んで一緒に来てもらってるわけですしね」

「……ごはんにしましょうか？」

方向音痴の俺さまは、国一番の勇者さまチームとクエスト中であ

る。
　といっても、俺さまはただのバイトですから荷物持ちくらいしかしません。
　最初は、魔法使いのおっちゃんの魔法玉とか神官のお兄ちゃんの授本とかいろいろと預かってたのですけども、……ねえ？　今は……ねええ？？　（笑）
「やったー、俺今日は鍋食べたかったんですよね、鍋」
　荷物の中身は、もはや消耗品しか残ってないのが現状である。
　理由は、迷子になる俺に貴重品は預けるべきではないと彼らが理解してくれたからだ。
　おかげで、重たい荷物が少し楽になったよ、イエーイ。
　そんな荷物から俺が取り出したのはお鍋である。
　ここに水筒から取り出した少量の水を入れて干し肉と一昨日の村で購入した野菜を刻んで投入。あと、浄化石を放り込んで火にかけるだけの簡単なお料理をするだけである。
「さて、ちょっと薪になりそうな木を探してきますか」
「「「待て」」」
「――　はい？」
　止められたので、振り向いた。
　目の前には、頭をかかえた勇者さまご一行。
「薪拾いなら私が行ってこよう」
　こめかみに指をあてて申し出てくださったのは、今回の勇者さまであるランディさん。
　１８人目の勇者さまである。
「…火縁石を使うかね？　私が火を熾そう」
　貴重な封石を提供しようとしてくれたのは、魔法使いのグランさん。
　火興しする際には魔法能力が必要なそれは、なかなか世間に普及されていないのである。
「「「――――　だから、君は動くんじゃない　」」」

三人そろってハモられた。
楽なのでいいんですけどもねー。
まぐまぐまぐ。
今日も飯はうまい。
とてもいいことだと思います。

さて、パーティはスムーズに進みます。
サクサク行きましょう、さくさくさく。
「あ、鳥がいるー」
「…ハーピーズか！　気をつけろ！」
人面鳥って、視線の行き先に困りますねえ。
「えっと、ここどこかな？」
「――　一人で出歩くなと言ったでしょうが！！」
追いかけてきてくれた魔法使いさんは、そういって近くにいたワーウルフを退治してくれました。
かーぎやー。
でも、男同士といえども生理的欲求は見えない場所まで離れたいと思っても仕方ないとおもうんですが。
「おおお、王冠！！」
「――　ホーリーふぃーるどっ！！」
神官のお兄ちゃんは、赤い顔で一気に術をかけてくれました。
おお、これは見事な結界ですなあ。
「――　どういう存在だ、おまえさんは」

勇者のため息は日に日に大きくなります。
よくあるよくある。
俺に出会った人々の基本ですから、その過程。
「…精神と肉体を解析したいですね」
いっそ、解体して…。
うぎゃあ、目が怖いですがな、グランさん。
これだから、魔法使いの知的好奇心って怖い。
「あなたに神の祝福がありますように」
真顔で祈りをしていただきました。
…やっぱり、この神官の兄ちゃん天然だったのかな？
「――　まあ、俺ですからねえ」
苦笑いしつつ、愛想笑いする。
人生ってせちがらい。
「――――　明日は、魔王城につけますよ」

うすぐもった魔が漂うこの場所にくるのは、もう終わりにしたい。
たとえ、それが国王陛下のお達しでも。

「よくきたな」
そんな魔王陛下の一言に、笑ってみせる。
一瞬だけ魔王の言葉が詰まった気がしたが、まあいいんじゃない

ですか？　俺のせいじゃないもん。
目当ての魔王との最終決戦に勇者さまご一行は沸き立っております。
「貴様が魔王か！」
「ミストル王国第１８魔王討伐選抜隊として、貴様を倒してみせる！」
「神の祝福をここに…！」
うん、テンプレ。
がんばってくださいませ、勇者さまがた。
燃える彼らをみながら、若いっていいなあと思う。
まあ、神官のケネス君以外は、俺より年上なんですけどね。
さて、これで俺のバイトおわりー。
どこで待機しましょうかねー、ってあった待機場所。
毛糸の手作りカバーがかかった座布団と、水筒一個。おやおや、今回はクッキー２枚ついてる。……味見したんだろうか？　まあ、新しい趣味が増えるのはいいことですね、つき合おうか。
ふかっと柔らかいクッションに癒されてまう、なにこの贅沢。持って帰れるものなら持ち帰りたい。
が、我が家にはすでに一個あるのだ。色違いの奴が。
なので、これはこの場所専用として残しておく。
「…讃の列は充たされる。交わされる午の列は光となりて敵を襲う。ーー光来爆！」
「…くらえ！」
「…権現せしは神の庇護……」
うん、火花が散ってますのう。
いいけど、こっちには向けないでねその魔法攻撃。
おれ防御できないので。
などと勝手なことをいいつつ、躊躇なく水筒の中身のホットミルクを注ぐ。うむ、最高。
さて、今回の新しいクッキーくんは…。うん、美味いよまあ手作

りならこんで十分だと思うし。
今度はもうちょっとカリッと焼き上げてくれると俺的には嬉しいかなあ。
などとクッキーの味の一人品評会を脳内にて開催する。
「……風姿の刃は輝ける！　香煙の熱は…！！」
「――術を消す、だと！　なんだあれは！」
「……まさか、転移させたのでは…」
おや？　この前暇なあまり落書きしてたのがまだ残ってやんの。
…つうか、固定化の魔法かかってねえか、これ？
――　暇なことしてんなあ。
そう思いつつ、国王陛下さまさまの似顔絵もどきをもくもくと書き連ねる。
うむ、このもだえるような髭のへなちょこぶりと目玉の小ささ、卑屈なまでに猫背な姿。まちがいなく、俺のバイトの雇い手だわ。はやく、倒れればいいのに。（毒）
己の画力のなさを知るが故に、このモデルを書いたと言っても過言ではない。ああ、ぞくぞくするこの背徳感。
だって、こんな絵あの国の中では書けませんやん、王様不敬罪って恐ろしいことになるからね。
と、書きあがったあとでふお？と気づいた。
「――　さすが」
感心してまうやろー、俺様。
書き上げたその似顔絵の心臓部分と股間のあたりに深い深いえぐったような穴があいていた。
――　すばらしい、先見の明。
わが国王様に深い憎しみを感じる者の犯行としか考えられませんね。いい仕事してますねえ！（いい笑顔）
「……っ！　かくなるうえはっ」
「――　王国は不滅だ！！」
…ん？　テンプレ聞こえた？

今回の勇者さまは強いと思ったんだけどもね。
――本気で魔王さまって強いなあ、当然か。

目の前で倒れた勇者様ご一行。

本当に、いい加減諦めればいいのにね、国王陛下。
そりゃあ、魔王を我が国の勇者が倒しました！　とかいったら政治上で優位に立てるだろうことは認めますよー？
国民からも敬意の目線で見られるだろうこともね、そしたら内乱とか反乱とか少なくなるかもですけども。
だけど、精鋭部隊による奇襲攻撃は止めたほうがいいよ？　どんだけ無駄に優秀な部下を失ってるの、バカみたい。
案内役として強制的につれてこられる俺様も大迷惑だっちゅーのよ。
「浄化」
魔王さまが、勇者たちの躯にむかってつぶやきました。
無念の顔だった勇者さまたちの顔は和らいでいきます。
――　お疲れさま、今度は別の国に生まれてくるといいと思うよー。
合掌してお見送り。
なにしろ、旅の連れ合いでしたからねえ。
今まで守ってくれてありがとー。
「……」
魔王様の視線がこっちにやってきたさー。
いえいえ、おきになさらずー。俺様もしばらくしたら帰りますので。
にっかり。
笑顔で手を振りました。
「――クッキー、美味しかったか？」
問われたら、答えてあげるのが世の情け。

「味はばっちり。でも、次は、もうちょっとさっくり固めに焼いていただけるとさらに俺好みのクッキーです」
「…そうか」
魔王様は頷いた。
ていうか、いつのまに新しい趣味開拓したの？　前回来たときは編み物だけだったのにさ。

昔の話だ。
俺はある日夢を見た。
「――貴様が、審魔者か」
黒一色の髪の毛と瞳、まとったマントとインナーの服。　履かれた剣にはぎょろりと目を動かす魔の玉石が見えた。
「ん、んんん～？　あんた誰かなあ？」
俺の夢はいわゆる鮮明夢である。
色も匂いも感触もすべて現実とかわらないような、そんな夢だ。
それでも、やっぱり夢ですから突飛なこともありますよ。空を飛ぶ夢とか女の子になった夢とか逆におっさんになった夢とか。
でも、これは初めてだったわけです。
もやっとした影から，いきなり人が現れました。
それも大変けっこうな魔力を持たれた方でした。
…うん、このひと人間じゃないわ。

そう思うくらいには、魔力の多い人でした。
「私は魔王だ」
そう告げられても、むしろ納得したね。
そのころの俺は、まだ故郷にすんでいた。
俺の方向音痴が隣町のもう一つ向こうあたりまでばれたころで、王都から召喚状が届くにはまだ幾ばくかの月日が残っていた時だった。
――幸せだった頃だ。
「…初めまして、魔王さま。で、俺死ぬの？」
魔王さんて存在と一般人が遭遇してみろ、まちがいなく墓場への直行シーンエンディング。今までありがとうおとうさんおかあさん村の人たち、と走馬燈のなかで呟く間もあるかないかと思うじゃないか。
ふらふらと、夢の中でも俺の体は危機意識をもってないようで。
世界で一番最強最凶とされる魔王さまに、ほてほてとよっていってしまう。
鮮明夢というのも、ちょっと考え物だろうなあ。
「…死にたいのか？」
魔王はどうやら俺の行動には特に気にすることもなく、ふらふらとしてる俺様をただ見つめるだけだった。
そして、俺様の体はあいもかわらず自制不可能。
ふらふらふら。
残る距離は約5フィア。
ふらふらふら。
残る距離は4、3、2、1…。
ああ、もう倒れ込むだけでそこには到達できる距離。
――俺、死んだ。
そう思いながら、答えを返す。
「俺は、いつだって生きたかったよ」
倒れ込むように、人の夢にまで潜り込んできた魔王さまに抱きつ

いた。
感じるのは、生きるモノの熱。汗の匂い。魔の放つ気配。――――ああ、そうだ。
俺はいつだって。
「　　」

夢の中で、魔王に出会った。
俺の特性は、そのことで確信となった。
実際に審魔者などというけったいな代物がどんな傍迷惑で支離滅裂ないきものかということを説明してくれたのは、俺が王宮でバイトという名の強制労働に収容されたときだったけど。
俺様の伝説には、意味があったのだ。
ハイハイしていた幼児の俺様が進んだ先には、小さなスライムがいた。顔はよくても力はない父親は叫びながら俺を抱えて逃げ出した。その後、母親が放った狩矢によってスライムはすぐ撃退できたのだけども。
釣りにいこうとして村の広場へと出かけたとき、そこには通信用に家畜化された魔鳥ラ・ルウがいた。村人Aは通信管理の役目をもつ魔法使い（初等級）だったというオチがつく。
隣町の行商へと付き添ったあのとき、そこにはゴブリンたちのグループがいて、隣町を襲うために集まってたりなんかしたんだとか。

おかげで、母親が備えあればで用意してくれた冒険者たちや魔法使いの総力をあげた戦いにまで発展した。場所が隣町の方に近い場所だったので、隣町も騒ぎに気づいたらしく応援の魔法使いや神官たちがやってきてくれたので、その日のうちに戦は決したのだが。
そう、俺様は魔に吸い寄せられる体質。（審魔者）であったのですね。
そんなもんじゃないかと思ってた？　うん、これもテンプレでしたかね、さーせん。

ずずずず～。
最後の一滴までホットミルクをすする現在の俺様。
好物なんだ、背がのびてほしいからなんて理由じゃないぜ。（成長期終わっちまったんだ、ちくしょう）
「ごちそうさまでした！」
「…お粗末様でした」
笑顔で水筒を返す。
目の前で、魔王様がそれを転移させていた。
転移魔法って人には扱えないんだよね、もはや神話級レベルの魔法だからさ。
それを普通に行う魔王さまってどんだけすごいんだろうかとか思ったのは、昔の俺様です。
今は、
「いいよね、その魔法。ーー俺も使いたいなあ」
そしたら、一気に話が終わるのに。
ちょっと残念におもう。
「なんだ？　ミストル王国の王族殺害でもする気か？」
だったら、手伝うが。
「…そんなことしたい気もするけど、ちょっと保留にしとくわー」
超絶いい笑顔で、国王暗殺を示唆してくる魔王様のダークさを見ました。…１８回も暗殺者（勇者チーム）送り出されたら、まあ苛

つくのもわかるんだが。
俺様まだそこまでの偉業を犯すつもりはありません。
「ふん。――人権無視して焼き印付きの隷属魔法なんぞをかけた相手のどこが大切なんだか」
……別に大切ではないけども。
右の腕に一つ、左の足に一つ、首の下に一つ。
その焼き印は残っている。
エンディング。
そう名付けられた、王族の秘法。――　人の精神と魂を縛る魔法。
そんなものなどなくてもよかったのにね。
ああ、でもおまえたちは俺様の大切なモノを奪ったから。
復讐をおそれたのだというのなら、わからなくもない。
もっとも、俺自身にどんな力があったかということもないではないけども。
「猫の首輪みたいなもんだからねえ、奴らにとってはただの貴重な魔物探知機ですから、俺様は」
魔王城案内人とお呼びください。
ま、貴重だからといってこき使うだけこき使ったあと、壊れたとしても連中は困りもしないだろうけども。
「魔法を使えば人間には当たらず、魔にぶちあたる。攻撃魔法でも補助魔法でも神聖魔法ですらそうなるらしいし」
おかげで、魔法は攻撃魔法と補助魔法の一部しか使えませんわ。
（意味ないからって教えてももらえなかった、俺様かわいそう）
「それは審魔者の特性の一つだからな、仕方ないか」
基本、審魔者は魔にすべてを捧げてしまうものなのだから。
魔王さまはこともなげにそういいきった。
まるで、俺様がマのつく特殊な愛好者みたいじゃないですか。
特殊なのは、おまえの魂の方だとすっぱりといわれそうですからいいませんが。
しかし…。

…いい匂い。
魔王様の気配が濃厚だ。
ぞくぞくしつつ、ほやほやとする嬉しくなる気持ち。
――まるで、恋でもしてるような表現だが。
でも、やっぱりいい匂い。
「くあああ、魔王様抱きついてもいいっすか？」
久しぶりに、充たされたい。
臆面もなくいいのけるのは審魔者の特性の一つかと訪ねたことがあるなあ、そういえば。
やっぱりそのときも、何度めかのバイトの後で彼女とだべっていたときだったか。
真っ赤になった彼女は「貴様の性格に決まっておるわ！」と断定してみせてくれましたが。
「……少しだけだぞ」
真っ赤な顔した魔王様（外見年齢２０代後半、実質年齢６０ほにゃららの女性である）の許可を得て、ふらふらと彼女に吸い寄せられていた体を素直に動かしてみた。
「あ～、幸せ」
魔王様の顔を顎の下にしつつ、ハイ抱っこ～。
さわってみると意外に小さい体の魔王様に癒しを覚えてはいけませんか？　駄目でも覚えちゃうんだけどさ。
「……おまえの幸せは、よくわからない」
俺の胸の中から、抱っこされた魔王様のつぶやきが聞こえた。
目を閉じて、第五感、第六感からの刺激を味わっていた俺様にも聞こえましたが、答えは返してはやりません。
だってさ、幸せだなんて。
俺にだってわからないよ、そんなこと。
だけどさ。
「…まだか？」
「ん～、もうちょっと」

甘えさせてくれる人がいることが幸せなことだなんていうのは、もう知ってるんだ。

転移の術を受けるのは、もう8回目だ。
それは逆に言うと、俺が魔王城へ訪れた回数にほかならない。
それは魔王でしか扱えない術の一つであるのだから。
「あはははは、またねー、魔王様」
「――――別に来なくてもいい」
霞む景色を見送りながら、魔王様に手を振った。
つんでれ？なにそれ、知らないけど。
必要なことがあったら、魔王様は夢渡りできるので問題ないんです。すばらしき友情の成立！
「俺が生きてたら、また会おうねえ」
笑顔で挨拶をしました。
縁起でもないことをいうなと、母親が生きてたらいいそうだけど。
残念ながら、現実はそうだから仕方ない。
転移される先は、人の住まう土地。
一度は、自国と別の国に転移させられたおかげで、牢屋に入ることまで経験させられた。もちろん、保釈金払って引き受けにきたよ、王宮の連中が。
…どこに行ってもこの焼き印がある以上、あの国から逃げられるはずなんかないんだけどね。

エンディング。
エンディング。
エンディング。　――　終末の刻印。

俺の故郷はもう消えた。
父も母も従姉妹もギルドの連中も。
小さな小さな村だった。
俺が生まれて育った、――愛してくれた場所だった。
その場所は、もうない。

秘密裏に村は滅ぼされた。
たった一人の、稀なる審魔者を手に入れるためだけに。
国の密命のもと、村は滅んだ。

「俺がいつか死んだら、この村に戻ってこれるかな」
自分の特性を朧気に理解した頃、俺はそう訊いた。
人のなかで生まれた異端者でも、俺はこの人たちの仲間であることが幸せだったから。
死ぬのは、きっと自分が先だと信じていた、あのころの俺。
「根性で戻ってらっしゃい」
「お父さんがいつでも一緒にいるよ！！」
叫んだ父親は、母の蹴りで床に沈んだ。
うん、おやすみパパン。――頭のたんこぶには塩でもかけておいてあげるね。（息子のなけなしの愛です沁み入るように味わって）
「どこでもいいのよ、帰る場所があるならそれだけでいい」
父を夢の世界に旅立たせた母親は、息も切らさずそうおれ様に続けた。

「あなたが帰りたいと思う場所を作りなさい」

迷子の俺は、今でも迷っている。
俺の帰る場所はどこにあるんだろうかと。
それでも、母さん。
俺はまだ生きたいと思ってるんだ、それは間違ってはいないよね。

夢の中で魔王に出会った。
魔王は、俺にいった。
おまえは審魔者。魔によりそうモノ。
おまえは、人よりも魔にこそ還ろうとするモノだ、と。

この体も、魂も、人のものなのだというのに。
帰ろうとする。
孵ろうとする。
———魔の存在へ。

奇妙な、迷子。

食われたいのでもなく、死にたいのでもないというのに。
俺の魂は帰ろうとする。
「死にたいのか」と訊かれた自分は、こう答えた。
「死にたいのではない。生きることが困難なだけなのだと」

魔物をおそれる人の本能。
魔物を慈しむ俺の本能。
壊れた本能を持った人として、俺は生きたいのだ。

いつか、世界に還る日がくるまで。

END

フィアは距離の単位。両手を広げた長さのこと。

方向音痴↓　引き寄せられる人を書きたくなりました。後悔はないですw
長い文のスクロール、お疲れさまでした！　><

（後書き）

今回も、長いスクロールお疲れ様です。
初めての方は、お疲れさまでした。

ありがとうございました。＞＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8805o/

方向音痴な俺様

2010年11月13日02時25分発行